

許光輝氏の急逝を悼む

2022/12/22 (木) ビューポイント

OKINAWA政治大学名誉教授 西田 健次郎

台湾人慰霊碑建立に尽力

沖縄との交流さらに深化を



OKINAWA政治大学名誉教授西田健次郎

日本と台湾の民間交流に渾身（こんしん）を尽くしてきた日本台湾平和基金会の許光輝理事が57歳で急逝した。国交断絶から50年の時を経たが、今や世界の平和と安寧を維持するには台湾の動向に懸かっている。許氏はそのための沖縄側のキーパーソンだった。

中国共産党は人口、軍事力、経済力、サイバー攻撃を用いて古（いにしえ）の中華帝国の成就を巧妙に展開している。そのあおりで台湾と尖閣諸島を含めた東シナ海に暗雲が漂っている。

尖閣と台湾が火薬庫に

世界の国々と人類への挑戦である。この暴風が露骨に始動したのは1968年、国連のアジア極東経済委員会（ECAFE）が「尖閣諸島周辺から日本海」には天然ガス、石油資源が大規模に存在していると公表してからだ。中国曰（いわ）く、琉球は中国の冊封を受けていた属国であり、台湾も下関条約で日本が強奪したのであり、琉球、台湾は古来、中国の領土、と公言している。

昨今は海警所属の武装漁船が日本の排他的経済水域や領海内を航行することが常習化している。恰（あたか）も中国の領土であるとの幻想をつくり上げる魂胆が見えだした。

尖閣と台湾が世界の火薬庫と化した原因が、中国にあるのは論ずるまでもない。地政学的にキーストーンの沖縄は、中国が仕掛ける赤いハリケーンに対峙（たいじ）する強い決意と覚悟が求められる。戦争は愚かで残酷であり、極力回避すべきだが、南シナ海のサンゴ礁を占有し、軍事

港湾・空港を強引に建設し、オランダ・ハーグの仲裁裁判所が中国の行為は国際法上、明白な違法との判決を下した。中国は、その判決を単なる「紙きれ」と嘯（うそぶ）いて無視している独裁国家なのだ。

筆者は日中友好連絡会議の会長を十数年余り務めた経験もあるので、いたずらに嫌中感情を煽（あお）るものではないが、日本政府があまりにも中国に配慮し過ぎている現状を批判せざるを得ない。

例えば、尖閣諸島の海底資源の鉱業権の試掘権は許可するが採掘権は許可しないのは、中国におもんばかっている証左であろう。72 年以来、国交断絶が続いているので、台湾と自衛隊の軍事演習も実施できないのだ。米国の高官が訪台すると、北朝鮮がミサイル実験を繰り返す、中国は軍事的・経済的圧力を露骨に始動する。この現実はどう向き合うのか。

今こそ、良き隣人たるウチナーが絆の深さを発揮するチャンスなのだ。この大事な時に許光輝氏を失ったのは残念である。

許氏は台湾のサンゴ礁の島、澎湖島で生まれ育ち、学業はトップクラスで若くして大学准教授になり、琉球大学に留学した後、岡山大学と金沢大学に留学し以来、台湾との懸け橋となって多くの功績を果たした。

日本兵として戦争で散華した約 3 万人の台湾人の軍人軍属の御霊を労（ねぎら）い顕彰する慰霊碑がないことにショックを受け、沖縄の友人らと共に動き出した。華僑総会、李登輝友の会、日本台湾交流協会や沖縄の友人に頭を下げ、浄財を集める苦労を買って出た。その真摯（しんし）な努力が報われ、2016 年、糸満市の平和祈念公園内に「台湾之塔」の建立が実現したのである。用地がなく途方に暮れていたところ、航空関係者（搭乗員、整備、補給、通信、警備等）を顕彰する沖縄翼友会（戦友会）から用地提供してもらった。許氏が号泣したのは、沖縄翼友会の慰霊祭での追悼の言葉である。以下に抜粋する。

「先の大戦で日本の陸海軍機の大半が台湾基地を經由し南方戦線に展開し。一方、傷を負った人も機体も台湾で癒やしてもらった。私共は同じ航空人の一員として「台湾慰霊塔」の建立地の提供が戦時中の御恩返し的一端となり日本と台湾の交流・日台親善の懸橋ともなれば是に過ぎるものはありません。」

用地を提供すると特攻兵をはじめとする航空関係者の英霊に報告してくれたのである。

琉球漁民慰霊碑建立も

そのほかに、許氏は烏山頭ダムの八田與一記念公園整備や台湾・基隆市の和平島公園に、台湾に漁業を教えた久高島出身の内間翁らを顕彰する「琉球漁民慰霊碑」（琉球ウミンチュの像）の建立にも尽力した。さらに、マンゴー栽培に至るまで、全くボランティアで台湾と沖縄の交流に尽くした。あと 10 年も現世（うつしよ）にいたならば、と思う。

私は、沖縄県民栄誉賞と天皇陛下による大きな勲章をと期待していたのだ。大変苦労したであろうが、最も愛し信頼した同郷・澎湖島出身の奥さま、娘たち、そして涙をこらえているわれら仲間も天国の窓から草葉の陰から善導していただきたい。

（にしだ・けんじろう）